



TITLE:

小さな図書室

AUTHOR(S):

宇野, 豊三

CITATION:

宇野, 豊三. 小さな図書室. 静脩 1968, 4(6): 1-1

ISSUE DATE:

1968-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36435>

RIGHT:



静脩

1968年 3月

Vol. 4, No. 6

The Kyoto University Library Bulletin

小さな図書館

宇野 豊 三

火災のお陰といえば甚だ不謹慎ではあるが、薬学部にも小さいながら図書館が建った。昭和37年暮の火災で図書室が全焼したときは私は全く茫然自失した。焼け残った図書もいくらかはあったが、水をかぶっては、姿はそのままでも紙が互にくっついて使用に耐えない。図書を失った学部の姿は実にみじめという他はない。図書館の復旧は急を要するが、また一面改革するとすればこの時をおいてない。限られた経費の中でのやりくりは、かなり気が重かった。

部局の図書館は研究図書館としての機能を最大限に発揮することがその主要な使命であると私は考えている。勿論経済的に余裕があれば、教育用の図書もそろえたいが、そのような余裕はとてもありそうにない。他部局にあるものを集めることはやめて、他部局にない図書を集めるようにしたら、という御忠告もいただいたが、元来自然科学系では、多くの雑誌から必要な文献をあさることが多いので、手元に雑誌があるということが重要なのである。特に薬学は地の利が悪く、いちいち他部局に出向いているようでは仕事にならない。父親が英語の辞書を持っているから、子供はそれを借りて使えばよいといっても、子供は承知しないのと同じで、たとえ重複しても必要な図書はそろえなくてはならない。何回かの図書委員会での協議の末、使用頻度の低い古い図書は一切割愛し、最近10年間のバックナンバーに復旧の重点を置いた。マイクロフィルムも使用頻度の高い図書については不便でこれも採用しなかった。

私は数年前パリ大学の薬学部の図書館を見学したことがある。地下の書庫にある膨大な蔵書に驚いたが、自然科学系ではこの古い本の利用がどの位あるかを思うとき、私のうらやましいという感じは薄らいだ。

学術雑誌の数が年々恐しい勢で増加するとき、この新しい図書館の書架も10年もたてば古い蔵書の処置に困ることになる。書架の間を歩きながらいつもこのことが気にかかる。

図書館の近代化が叫ばれ、情報サービスが重要な問題となっている。このことは充分心懸けているつもりではあるけれども、結局予算と人員の問題にぶつかる。許される範囲で徐々に情報サービスの仕事を拡げて行く他はないが、それ以前に限られた人員で仕事の能率を上げるには、他部局図書室ならびに中央図書館との連絡事務の簡素化の実現が必要である。

ともあれゼロックス複写も年間10万枚をこえ、この小さな図書館は、それなりに十分に機能を発揮している。私は決して大きな図書館をうらやましく思っていない。(薬学部教授)